

君津市立中央図書館のあゆみ

山口 博行

思えば遠くへ来たもんだ？

平成14年10月に開館して5年が過ぎ、図書館には毎日人が押し寄せ、職員はてんてこ舞いの毎日を送っている。

資料の質と奥行き、サービスの質など、改善が必要な課題は山積しているが、平成17年度の君津の貸出114万冊は、全国と同規模(人口8~10万)自治体71市でトップとなった。

移動図書館と体育館図書室を中心にこつこつとサービスを続けてきた20数年をふりかえると隔世の感がある、市民の図書館の成長期を少し(?)遅れて追かけた君津のあゆみを振り返ってみたい。

ブラウン式もカード目録も使ったことのない世代の若い図書館員の参考になれば幸いである。

公民館図書室時代

戦前の君津の市域には、幾つもの町村立図書館や通俗図書館などがあり、八幡製鉄所の進出に伴う1970年の大合併に前後して各地区に建設された6公民館の図書室に、その伝統は引き継がれ条例上の図書館となった。

それらの規模は平均33㎡、蔵書は各々数千冊と小規模で、目録もなく、資料費も少なく、貸出方式はマチマチで利用者のプライバシーは考慮されておらず、利用も少なかった。

しかし、市独自の社会教育主事採用試験を行い、6公民館全てに社会教育主事を配置するなどの先進的な社会教育・公民館活動が、図書館とそれを支える市民をうみだす母胎となった。

図書館ひまわり号のスタート

1976年社会教育関係職員に司書有資格者が2名になったこともあり、当時の社会教育係長が「図書館に力を入れてみるか」と判断し、2年連続してメインテーマに図書館をすえて市の社会教育振興大会を実施し、清水正三氏、萩原祥三氏を講師に招いた。同時に社会教育委員会でも『図書館の発見』等をテキストとした学習会を持ち、名古屋の西図書館などの先進図書館の視察を行い、「君津市立図書館の整備について」の建議を行った。

このような経緯の中で、社会教育委員長が会長をつとめる君津ライオンズクラブが創立10周年記念として市に何か寄贈しようということになり「移動図書館車」を寄贈してくれることとなった。

BM(移動図書館車)の運行開始を控え、習志野市立図書館を訪ね、ブラウン式のカードケースを幾つも積んだり、出発前に職員がリクエストのかかった書名を暗記したりする様子を見学した。

また、初めてBMの貸出に電算端末を採用した多摩市立図書館を職員一同で訪れ、若い職員のアパートに一週間泊まり込み実地研修を行った。

1978年7月「移動図書館ひまわり号」の運行開始。君津市で初めて専任職員の配置された図書館「君津市立移動図書館」が設置された。本館を持たず教育機関の名称が「移動図書館」というのは全国でも珍しかった。

「ひまわり号」は市民特に子どもや主婦に大好評で、社宅団地のステーションは90分の駐車時間に1,100冊を超える貸出を記録した事もあり、移動図書館全体で最盛期は年間に11万6千冊の貸出を行っていた。

貸出には多摩市と同じM社の端末を使用

した、かなりの重量があり中型のアタッシュケース程の大きさで、データはカセットテープに記録した。

初期の段階では、ホストコンピュータは置かず、カセットテープをM社に送りデータのバッチ処理を行った。当時のシステムは日本語処理ができず、利用者と図書番号管理のみで、リクエストは目録カードで検索し端末機に手入力した。

市域が広い君津市では、ステーション間の距離も離れており大嵐でもない限り休めない。”雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ”本も職員も濡れ、カイロを懐に入れて貸出をしていると、利用者が温かい缶コーヒーを差し入れてくれたことなども今は懐かしい。

また、この時期に公民館図書室を回り、使用可能な全ての蔵書の目録カードを作成し、図書ラベルの貼付も行った。まがりなりにも君津市のユニオンカタログができ、リクエスト対応の幅も広がった。

同時に公民館の貸出方式をブラウン式に統一し、装備も行った。各公民館に配布した貸出や運用のマニュアルには『市民の図書館』のコピーを多用させてもらった。

私たちのスタートした時代の理論的な根拠は『中小レポート』であり、運営のノウハウの拠り所は『市民の図書館』だった。

市民体育館図書室のオープン

1983年7月、補助金で建設された市民体育館に併設した図書室がオープンし、移動図書館職員が運営に当たることになり、君津市で初めて専任職員の配置された固定館が誕生した。

220㎡、収蔵3万冊と小規模の施設ではあったが、めざましい利用があり、年間19万冊近い貸出があった。

ホストコンピュータをここに設置し、市内6公民館ともオンラインで結び、ようやく利用券の共通利用が可能となった。同時に公民館図書室の購入図書も共通装備、共同購入が始まった。

図書館建設準備室の設置

君津の社会教育は、婦人を中心とした多くの市民、グループを育て、「婦人のつどい」が開催されるようになり、その中から1981年に「図書館を考える会」が結成され、学習会や見学会など地道な活動を続けていた。

この会を中心とした署名活動が展開され、1995年「市立図書館建設を促す署名」22,000名分が市長に提出された。

このような図書館を求める気運の中、1996年に移動図書館職員との兼務で「図書館建設準備室」が設置され、庁内の「図書館建設準備委員会」や市民の声を聞き、図書館への理解を深めてもらう「図書館づくり市民フォーラム」が開始された。

1998年には、先に報告書「君津の図書館計画1991」の作成を委託した菅原峻氏を委員長とした「設計者選定委員会」により、プロポーザル方式による設計者の選定を行い、参加した各設計者によるプレゼンテーションは市民に公開し、図書館建築の経験豊かな設計者が選定された。

中央図書館の開館

平成10～11年度に基本設計・実施設計を行い、平成12～14年度の3ヶ年にかけて建設が行われ、平成14年10月に市民待望の図書館が開館した。

「図書館を考える会」を中心とした多くの市民が準備を進め「開館まつり」を開いてくれた。

手作りの郷土料理が並んだ会場では、市長、前市長、設計者、各施工業者の現場責任者に似顔絵の入ったこれも手作りの感謝状が手渡された。

浦安、朝霞、伊万里、滋賀県など多くの図書館を視察し指導を受け、幾つもの手法を取り入れた。

開架書庫やテーマ別コーナーを設け、雑誌や参考図書を混配し、複製絵画やおもちやも貸出し、コミックやAV資料などにも重点を置いた。

開館に至るまでは、君津市固有の道のりがあったが、今の悩みは、大型図書館に共通の

ものだ。

適切な開館時間や開館日とは？小規模分室や移動図書館の効果的な運営とは？市民や利用者との連携、レファレンスの質の向上、資料やメディアそして要求の多様化への対応、利用の増加に伴う慢性的な人手不足、利用者の「こまったさん」の増加、資料の延滞や不明や破損の増加等々、短期的・長期的な課題はつきない、また長い道のりが始まったようだ。

(君津市立中央図書館 副館長)